

## 第5期町田市民文学館運営協議会第2回議事録

- 開催日時 2020年12月22日(火) 18:00~20:10
- 開催場所 町田市民文学館 大会議室
- 出席委員 会長 渡邊正彦  
副会長 竹内栄美子  
委員 阿部哲也  
委員 瀬川ゆき  
委員 長尾洋子  
委員 平井宏典
- 欠席委員 委員 熊谷玄  
委員 名取玲子  
委員 吉田孔一
- 事務局出席職員  
市民文学館担当課長 江波戸恵子  
担当係長 加藤剛  
担当係長(学芸員) 神林由貴子  
主任 小泉仁美  
主任(学芸員) 山端穂  
主任(学芸員) 谷口朋子
- 資料  
資料1 運営協議会のまとめと事務局案  
資料2 「ことばらんど」つながり一覧  
資料3 つながりの図  
資料4 効率的・効果的な運営体制のまとめに向けて(中間)  
資料5 2019年度課別行政評価シート

### ○ 次第

#### 開会

#### 議事

##### 1 報告事項

【事務局】「i. 10月20日から12月21日までの文学館の出来事」、「ii. 2021年1月からの事業予定」について事務局から報告

【委員】質問、意見等は特になし

##### 2 討議

(1) ポストコロナ時代に、文学館など文化施設に求められることについて

**【事務局】**「(1) ポストコロナ時代に、文学館など文化施設に求められることについて」事務局から説明

**【議長】**資料1について事務局から説明いただいた。事務局サイドとしては「つながる」ということをキーワードとして、手法としてデジタルとリアルを融合させていく、対象は中学生から20歳代という若い世代、そして近隣の町内会・店舗・商店会・市内企業がそのコンセプトの柱になっていくと考えているとのことであった。まずは、第1回の要点をまとめた部分についてご意見やご質問があればお願いしたい。

**【委員】**質問、意見等は特になし

**【議長】**それでは、Logo チャットにお寄せ下さったご意見についてご説明いただきたい。

**【委員】**私もデジタルでリアルのオフラインの社会が全部なくなるとは思っていないで、さらにもう少し深く考えが及び、町田市民文学館のプロパティをもっと魅力的にしていくアイデアがデジタルトランスフォーメーションというデザインの中になければ駄目ではないかということと今日いろいろと提案したい。

文学館の活性化が第一であるが、実体のある立案も同時にしたいと考えている。現状の課題は、(1) 目指す姿というのが果たして求められるニーズに近いものかどうか、(2) デジタルデバイスの使い方も含めて当館の価値観を増大していかなければならない、(3) 芸術の杜という新たな視点で文学館が芸術に調和するくらいの勢いで施設としての役割を担うべきではないか、の3点である。

いろんな原石がある中で、それを拾い集めて当館が進んでいくべきインサイトを見つけていくしかない。その上でPDCAを回していく覚悟が必要である。

次にそれをもう少し、どうなりたい、どうしてほしいという目的に落としてみると、(1) 文学館への利用者の回復、(2) デジタル化をどう捉えるか、(3) 公園の活用を含めてリンクして考える、となる。

アフターデジタルの幕開けはもう少し後に来るかもしれないが、その前に新型コロナが先に来てしまった。これは、ポストコロナ、コロナが起こる前に戻ることを期待するのではなくて、ウィズコロナと考えなければならない。そういう時代においてリアルな存在である文学館を中心としたコミュニティをデジタルトランスフォーメーションによって活性化しようということである。

次はターゲット、ロイヤリティだが、どなたを狙うと可能性があるかということ、デジタルデバイスを使うか使わないかでシニア層と若年層に大きく2つに分けた。シニア層は既存客で、文学やこの館に慣れ親しんでいるアナログ世代。そして若年層は高校生、大学生を中心とした新デジタルを感じている、文学や文化施設には疎い世代であ

る。

乗り越えるべき障壁は、シニア層ではコロナ禍で外出や来館を自粛していること、利用モチベーションが減少しつつあること、デジタル化とは対極にあって利用しづらいと思っていること。対して若い人たちは、文学に対してレレバンシーがないこと、自分事ではないこと。この「ごと」というのが大事である。それから承認欲求を満たすツールにはなりえないとこの施設を思っていることである。

それではターゲットの日常は何か。シニア層は可処分時間にゆとりがあって、日中は働きたいと思っている。頭と身体は元気で、衰えたくないののでいつまでも活動したい。退職後に属するものが少なく、何かに携わってみたい、関わってみたい。アナログメディアが安心である。スマホは持っているが駆使しているとは言えない。対して若年層は学校を中心にした生活である。デジタルが身近にある。家と学校周辺が活動範囲である。新しいことに興味津々。SNSを活用していろいろなコミュニティに向けて自ら発信して、承認欲求が強い。

行動変容のきっかけは、シニア層は、活動の場所やコミュニティを拡充していく。能力を活かしていく。とっつきやすいデジタル、プラットフォームを提供すれば接点生まれる。また若い人たちは、地元での活動の場やコミュニティの存在を認知してもらおう。新しい、楽しいプラットフォームを提供する。SNSで発信したくなるようなネタを提供する。

以上を踏まえて施策のアイデアとしては、具体的になるがシニア層には語学学習のボランティアをしてもらったらどうか。例えばミーティングというソフトがある。ミーティングはデジタル会議ソフトで、これは言ったことが全部文字化できる。だから速記も書記もいらぬ。また、そこで見ている人たちがここを見ているか、席を立っているかということも分かる。それから、それを誰かが入ってちゃんと教育的なソフトになっているか監視もできる。サーバーにアクセスしないでコンピューターとコンピューターをつないで6人くらいで会話ができる。日本語を研究しているタイやベトナムの学生たちは、カリキュラムの一つとして「1週間に10時間日本語をネイティブで話す人もしくは日本にいる人たちとコミュニケーションをとってきて下さい。」という宿題が出る。ただ、そのような人がすぐ身の回りにいるとは限らない。学生たちは困っている。定年退職をした60歳、65歳の人たちは、まだ脚も腰も頭も大丈夫で宝の持ち腐れになっている。その人たちとアクセスするようなもの、例えばミーティングのようなものでつないであげると学生たちはとても助かるのではないか。具体的によくやるのは漢字をテーマにして、例えば漢字の成り立ちはどうかというのをやって、その後15分から20分間、経験のあるシニア層が海外の学生たちに日本語のアプローチをする。ミーティングは月に3万円、年

間 36 万円かかるが、こういうことを実際に半年くらい試験的にやってみて問題になったのは、果たしてクオリティ良くコントロールできているのかということであった。これは当館の担当者が必ずツイートを見ていて、NGワードは避けるようにというワーニングを出すことが出来るし、もちろん見ていなくても記録が残るので、そういう方は次から警告を出して控えていただくことが出来る。シニア層の語学学習ボランティアによって日本語検定の全面サポートができる。またキャリアを活かした生き甲斐の形成にもなる。そして、それは 2025 年問題、人口減少対策に対応していくことにもつながる。それから、公園とのつながりでは、芹が谷公園の座標軸に AR（拡張現実）を配置しておいて、そこから拾ってきて、例えば俳句とか和歌を作って、文学館側で吐き出して作品展示するということが出来ないか。実写の上に AR で文字や映像を配置して動かすことも可能である。

次に、若い世代には、言葉、歌、詩、文学、写真、映像、アーティストを町田の切り口で展開して、公園や町に点在する QR コードから還元して、文学や文字など自分事にたくさん配置して遊んで楽しむというものを作る。次に、言葉全般を網羅したアプリやポータルを運営する文学館を総本山化していく。DX や ICT で遊んだ情報をリアルに当館でも展開していけたら、彼らの承認欲求が満たされるのではないか。また、アーティストのメロディに歌詞をつけて楽曲を完成して発表するみたいなことは出来ないか。楽曲だけが出来ていて若い人たちが歌詞をつけながら曲を完成して町田市の歌を作りましょうとか、全員参加型のソフトを作ることが出来る。

そして、言葉の総本山計画であるが、「言葉の樹」というのを文学館の中に作ったらどうか。四国に漂流郵便局というのがあって、ここに何が届くかということ、思いを遂げたいけれども初恋の時の人がどこにいるか分からない、そういう人の手紙であるとか、若い頃に亡くなったお父さんやお母さんに対する感謝の気持ちをどこへ出したら良いか分からない人のサンタさんへの手紙とか、そういうのをポストに投函すると気の利いた郵便局はここに届けてくれる。それがここに全部並んでいる。これを見ることも出来るし、どういう思いでここに来たかということを書いてポストに入れることも出来る。それをまた自由に閲覧することも出来る。非常に感動的である。それを文学館でどういう言葉の樹にするかということ、例えばこの間の展覧会の感想であるとか自分で書いた句であるとかを貼り付ける。実際にはないけれども AR のデジタルカメラで見ると文学館のサロンに樹があってキラキラと葉っぱの中に文字が入っている。それが常設していて、テーマが変わるときにその葉っぱが落葉して新しい葉っぱになる。デジタルといっても実体のある、ここに寄ってきて、ここに集まることで得られるリアルというものを感じ取っていただければ、そんなに血の通

っていないデジタルトランスフォーメーションにはならないのではないか。配置設計をするのに、システムを構築してどこに何をという座標軸を計算するということが200万から300万円コストがかかるかもしれないが、一度設定してしまえばその後の中身を変えて使うことはどのようにでも出来る。

- 【議長】** 今のご説明に対して、ご質問やご意見があればお願いしたい。
- 【議長】** リアルとデジタルの融合ということで、例えば若い人たちの承認欲求を刺激して、曲に詩を若い人につけてもらうというのは分かるが、最後の言葉の総本山計画ではどういうところをデジタルとリアルとの融合と考えているのか。
- 【委員】** やはり「自分事」として参加型でなければ、デジタルと言っても取っつきが悪い。自分がそこに提示したということをしてシニアも若い人たちも感じることができる参加型のデジタルである。
- 【議長】** ただ見るだけではなくて。
- 【委員】** 今の原稿用紙展も素晴らしい。でもそれは過去に成功した人、活躍した人の結果である。自分がそれを作るという感覚になるのはデジタルでないと出来ない。もし人気が無ければ別の企画に変えてしまう。言葉の樹は残っているがテーマを変えていく。樹はどんどん大きくなるが、1年という期間をつけて落葉していくようなイメージである。
- 【議長】** 多分デジタルとリアルとの融合というときに、いろいろな博物館、美術館が全国にあって、コロナの状況下でいろんなことを考えていると思う。そういう時に博物館、美術館が全国規模で進んでいくべき方向性みたいなものを考えているところと、もう一つ個別に当館ではこういうことをしていきたいということの両方があると思う。例えば、世田谷文学館ではリアルとデジタルの融合というときに何か目指している方向はあるか。
- 【委員】** 現在はなかなかリアルとデジタルを融合させようというところまでは考えていない。ただ、今のプレゼンで一番響いたのは、目指す姿と求められる姿が必ずしもイコールではないという所である。デジタルをどうする、リアルをどうするという前にそこに常に帰って考えなければならない。それと、今回のターゲットはグランドシニアと高校生から大学生に絞って見たらということであったが、ターゲットをどこに向けていくかというのは運営を考えていくときの基本になっていくと思う。漂流郵便局は大変面白いアイデアで、それに代わる何かが出来たら、リアルでデジタルでなくてお金をかけずに出来ればよいなと思った。ターゲットは全部をすくい上げるのは困難だと思っているので、まずはターゲットを決めて、そしてだんだんいろんな方についてくるという姿勢が、成長戦略の姿勢として、非常に興味深く領けるころが多くお話を聞かせていただいた。
- 【委員】** ここでいうターゲットは小学生もあり得ると思う。

- 【委員】おそらく高校生から大学生というのは、実は文化施設にとっては難しいターゲットである。ニーズが必ずあるところに向けてボールを投げて、成功体験を積み重ねていくしかない。そこで何かデジタルで取り上げられるところを少しずつやれるところからやっていく。
- 【委員】言葉の樹を文学館に植えるというのはすごく良いフレーズだと思った。今のお話は、文学館に実際の樹ではなくてデジタルで樹が設えられて、そこに葉っぱのような形でいろんな人から投稿があった言葉が記載されて、ということか。そうすると、先ほど歌を歌いながら詩が流れる映像があったが、あの映像とこの言葉の樹は別物であるか。
- 【委員】方法論が同じであるが別物である。
- 【委員】樹があるというのは、文学館に来て見る、ということか。
- 【委員】実際に来なければいけないというところがミソである。
- 【委員】福井県の丸岡という町が「一筆啓上賞」というのをずっとやっていて、本当に短い手紙を投稿する。親に宛てるとか、かつての恋人に宛てるとか、何でも良いが、それで選ばれて表彰式みたいのがあるが、そういうのを思い浮かべた。自分の言葉が選ばれて掲載されるとか表彰されるとか、そういうふうになると、先ほど参加型ということで自分事が大事だとあったが、興味をもたれるかなと思った。
- 【委員】一筆啓上型は素晴らしいと思う。長い文章だと誰も読まない。自分も読まないし、相手にも届かない。ここでのインセンティブはたった一つで、言葉の樹に一筆啓上型で貼り付けていくところを文学館に来て見るということである。
- 【委員】ここは「ことばらんど」という命名なので、言葉に着目してやっていくのは良いアイデアだと思う。言葉の樹を文学館に植えるというフレーズが素敵だなと思って聞いていた。
- 【委員】大変興味深く拝聴した。今までやっていたコンテンツを単なるデジタルに置き換えるだけでは不十分であると思う。単純に今あるコンテンツをデジタルに換えただけでは本物の持っている感動を伝えることは出来ない。デジタルならデジタルのやり方が有効なものを最初からコンテンツとして、デジタルだからこそ意味がある取組をやらなければよい方策ではないと感じている。デジタルアーカイブは必要な事業なのでコロナを機会に美術館や博物館でやっているが、デジタルアーカイブを作ったからといって利用者が多いかということと多くない。その原因のひとつは、そもそもその館が何をやっているか、コレクションとして何を持っているかということをしちんと理解して頂けていない。周知できていない。何を持っているか分からない所にデジタルアーカイブがあっても誰もアクセスしない。ユニークなコンテンツを作ることも大切だが、まずはどう知っていただくかという部分が非常に大切である。今まで文学館に来館されないとか観ていただけない方というのは興味がないからであって、興味がない

人にどうやってきっかけを作るのか、そこをデジタルとリアルの両方できちんと考えていかないと市民の利用につながらないと思う。

**【委員】** デジタルにいろいろな可能性があるということを見せただけだ。融合という言葉は本当に溶け合っていくようなイメージがあるが、私としてはリアルとデジタルで出来ることを組み合わせていくことのように感じている。手書きで言葉を映像の中に刻んでいき、出来上がった作品として受け止められるような、インパクトがありつつ日常性も感じられることがデジタルで可能になる、そういうクリエイティブな世界を若い人が体験できる機会を増やしていくのはすごく大事なことだと思う。大学の中でもそういう試みは行われていると思うが、学校の中にはない社会の中でそういうことが行われていることを若い人が体験できる機会が増えたら素晴らしいことだと思う。そこにシニアの方と若い人がクリエイティブな部分で接点を持てたらさらに良いと思った。そういう意味で言葉の樹というのが有効に働くのではないかとこの予感を得た。シニア層のひとつの役割として公園と文学をつなぐということがあり得るのではないかとおっしゃっていたが、これは若年層をターゲットとした場合もイベントのような形で十分企画が可能だと思う。そういった活動の参考になればと思い冊子をお配りした。冊子のオレンジ版の3ページと4ページのような企画もデジタルを使ったら新たな形に出来るのではないかと。町田市と和光大学は包括協定を結んでいるので、そういう枠組みを活かして、例えば文学館でしている面白い企画を大学の地域連携センターとか図書館などでどんどんリツイートしてもらおう。リツイートする協定ではないけれどそういう申し合わせをして、町田の広報という紙の媒体だけでなくでどんどん情報が拡散していくような仕組みを作っていく。若い人でも楽しめそうな参加型でクリエイティブな要素が入っている活動は、そこでの様子や成果を資源として活用していきけるような活動のあり方を模索していくと、俳句を作りました、その会でこういう成果がありましたということではなくて、それがシリーズだったら総合して最後に映像作品的なものに仕立てるとか、何かそういう展開はあり得るのではないかとこの予感を得た。

**【委員】** まさにあのミュージシャンのプロモーションはポケモンゴーである。そこそこに隠れている物を拾い上げて行って歌詞を知ることである。それをインタラクティブに自分も参加して、メロディがある所にリックをのせて行って完成するという方法である。私がここで提案したいのはインタラクティブにここにも届く、樹にもものつけることが出来る、それで俳句が出来て、これは隣のおじいさんの俳句だと分かってしまうみたいな、そういう楽しさや面白さがあるということである。

**【委員】** コラボ作品として参加した人が享受できる、それをまた作品として第三者も享受できる、というサイクルが出来てくると楽しいと思う。

**【委員】** 先ほど語学学習のボランティアの提案をしたときに 2025 年問題の話をしたが、これからの人口減少問題は町田市も他人ごとではない。日本の大きな問題は 2025 年問題ではなくて 2050 年問題である。2050 年になると今の人口が 3 分の 2 減少するそうである。3 分の 1 しか残らない可能性がある。1 億 2 千万人が 4 千万人強になる可能性がある。ネズミ算的に減っていく。そうすると今ある道路も 3 分の 2 にぺんぺん草が生えてしまうことになる。そうなってくると、規制を緩和して海外の人間を取り入れないといけな。町田市教育委員会は、教育というテーマがあり、言葉というサブテーマがある。町田市教育委員会は言葉、日本語というサブテーマで海外の人たちがこの国に入りやすい、町田に入りやすい、町田の企業に入りやすい、レーバーを獲得する一つのソースを作った、作る可能性があるよと提案すれば、予算もつくのではないかと思う。

.....  
**(2) ポストコロナ時代 (アフターデジタル) における「つながり」について**

**【議長】** 後半は、さきほど事務局から提案があったキーワードの「つながり」について、そのコンセプトを具現化するための効率的・効果的な運営体制について、委員の皆様とお話ししていきたいと思う。それでは、事務局から資料の説明をお願いしたい。

**【事務局】** (2) ポストコロナ時代 (アフターデジタル) における「つながり」について、事務局から説明

**【議長】** 「つながり」というコンセプトについて、ご質問、ご意見をお願いしたい。

**【委員】** 個人的な意見だが、公共施設はどうしても公共という性格から幅広く考えていくことが多いと思う。マンパワーは限られているので、事業計画では中学生から 20 歳代の若い世代というように自分たちがつながる対象を考えているのだから、そこにきちんと注力することが大切である。例えば、1 年間そこだけをターゲットにしてきちんと成果を出すという考え方をした方が良い。幅広にやっていくことで資源が分散されて、手を広げすぎた結果、成果があまり出ない形で終わってしまうのは一番残念なことである。まずは 1 つ 2 つに絞って、事業名もきちんとタイトル付けをして、ある対象に対してしっかりと集中的にやっていくことをした方が良いと思う。もう一つは点で考えるのではなく線で考えるということである。きっかけはどうしても点で考えてしまいがちだが、何故つながりたいのか、どうつながりたいのか、つながった先に何を描いているのか、という未来志向の線で考える。取っ掛かりだけ作れば良いとすると簡単なイベントなどの開催だけで終わってしまう。1 回この人たちと一緒に出来れば良い



やではなくて、それをどうシリーズ化していくかとか、つながっていくプロセスをどうデザインしていくかという形で対象とのつながりを考えることが大切だと思う。例えば、さきほど配られた資料の青い冊子に「まちまちトーク・クロッシング」というイベントが書いてあるが、その連携相手はキープ・ウィル・グループという元気な企業で、彼らはコワーキングスペースや武相庵というゲストハウス兼カフェに非常に多くの本を置いたりして、ゲストたちに単なる飲食だけではなく本や思想を提供することもしている、若いお客さんがたくさん来ているお店である。企業を単なるファンドレイジングの相手ではなく、館には来ない客層のいる場所という捉え方をすれば、本を大切にしている企業とつながって本のイベントを一緒に行うとかそういうことでよりリーチを広げていくこともあると思う。自分たちの所に若い人がいないのであればどこに若い人がいるのか、どういう人たちが自分たちと一緒にやりたい人たちなのかというのを具体的に探して、決めたのであれば1年間は脇目も振らずにそこに資源を集中させて成果を出すという取り組みをやっていくべきであると思う。

**【委員】**マンパワーが限られているというのはあると思う。学生さんたちのフィールドワークなどのゼミで参加していただけるのであれば、学生さんたちがボランティアのような形で、文学館と学生さんたちの共同作業による町田の魅力再発見的なイベントを計画していくというのは、すぐに取り掛かれるつながりになるのかなと思った。

**【委員】**ボランティアはなかなか難しく、有志の活動みたいな形で展開しようとしたときもあったが、授業の枠組みを上手に利用しないと学生も意義を感じにくい。実際に時間を割き、エネルギーを割きとなると、しかも先生から声をかけられているとか、いろいろな事情を学生の身になってみると、授業と結びつけて行うのが一番効果が高くて良い。ただその場合には連携で組織同士がきちんと理解し合っ、お互いどういう枠組みの中でどのような活動が出来るのか、どんな効果がお互いに上げられるのかということを確認しながら行うという作業が必要だと思う。少し息を長く保つという意味では講師を派遣していただくということを1年に1回とか2年に1回とか考えていく。それで研究室単位でフィールドワークを行う授業のコンテンツとして文学館と文学散歩みたいなことを授業の活動の枠組みの中で行うとか、そういう風にメリハリを付けていくことが大事だと感じた。

**【委員】**もちろん方法論は模索しなければならないが、実は世田谷文学館は近くに日本女子体育大学があり、そこのダンス研究部のゼミの先生にお願いして、その学生さんたちにボランティアではないが講師になってもらい、ダンスのワークショップ、身体表現のワークショップをしていただいた。たくさんの方をこなしていくのは難しいが、やりよ

うはあるのかなと思う。

**【委員】** やりようはあると思う。大人の方たちは、情報の拡散する範囲は町田の広報紙がメインになると思う。ところが大学の学生は、結構広い範囲から大学に来ている。そういう人たちがこちらの館に参加して刺激を与え合うのは、長い目で見たら健全なことなのではないか。ここでの経験がいろんなところに飛び火していく可能性も秘めていると思う。

**【議長】** つながりということでは、狭い範囲でつながることも出来るが、もう一つは無理矢理巻き込んでいくようなつながりもあると思う。先ほどシニア層がスマホを使いこなせないという話があったが、それはシニア層の中にスマホによって得られるものに必要性を感じていない方がいるということである。そういうことを考えると、対話性がつながりを作り出していくときに重要なのではないか。リアルとデジタルの融合というときには多様性を常に意識して良いのではないか。ある一つの狭いところに限定的にピンポイントに着地しなくても、つながりという意識の中で多様なものを許容できるという意味で、今日お出しいただいたアイデアの一つ一つが光を放っていると思う。融合するというのは多様性を容認することにつながっていると思う。

**【委員】** 少し疑念を持つのが、まずこの表そのものがウォンツで形成されていて、ニーズが入っていないことである。これでつながって何が得られて、何を期待するのか、現実を考えないと絵に描いた餅になってしまう。

### (3) 効率的・効果的な運営体制について

**【事務局】** (3) 効率的・効果的な運営体制について、事務局から説明

**【委員】** ニーズの話があったが、博物館にとって最も大切なのはミッションである。文学館が掲げるミッションがあるのであれば、大衆が文学を望まないからといって文学をやらないのかということとそうではない。ニーズ＝大衆迎合ではないが、ニーズは汲まないといけないと思うが、文学館としてしなければいけない芯のところはニーズがなかろうがやらなければいけない。そこは非営利組織であり博物館であるので、胸を張って言うべきではないかと思う。事業展開のあり方は、きちんとニーズを汲んだり、今風なやり方を展開したりする工夫は必要だと思う。もう一つ、歳入の増加、寄付金等の検討については、私は文学館が歳入の増加に注力する事業だとは思えないということを見解として申し上げたい。カフェなどの付帯事業で収入が見込めるわけでもない館が一生懸命収入増加を検討する必要性はないと思う。図書館にお金儲けしろという人はいない。運営形態として図書館に近い形でやっているわけだから、10万、20万の収入を目指すよりもより効果的な事業をきちんとする方が経営的にはよいと思う。ただ、助成金は積極的に探っていった方がよいと思う。それから、新型コロナ

ウイルス感染拡大という現状を考えれば、事業成果の方向を展覧会観覧者数と新規観覧者割合に求めるのは現実的ではない。自分たちの事業を新たにどのように評価していくのかということを検討された方が良い。学習事業から普及事業にというのは分かるが、こういう館のスタイルだと学習事業も必要ではないかと思う。割とライトに出来ることもあると思うので、必ず展示と関連したことしかしないというよりも、もう少し間口を広げ、文学の楽しさを伝えるような可能性を残した方がむしろ若者をターゲットにするときのきっかけ作りとして良いのではないかと思う。普及活動しかしないとすると自分の首を絞めてしまうことにならないか心配である。

**【委員】** ミッションは世の中の移り変わりとともに少しずつ変化していくのではないかと思うが、まずミッションがあって、ニーズを受け止めていくというのはそのとおりであると思う。ニーズのないところに玉を投げては駄目である。けれども博物館としてしなければならないことは当然やっていかなければならない。それから、補助金はなかなか文化関係には厳しいが、文化庁の補助金が明後日から募集が始まるのでご覧になってはいかがか。地域との協働ということで世田谷文学館では毎年受けている。それは地域のいろいろな団体に実行委員になってもらわないと申請できないものである。例えば外枠から決めていって自分たちの運営方法を広げていくという方法もある。来年が難しいということであれば、その翌年のために準備することは出来ると思う。

**【委員】** ひとつだけ、デジタル＋リアルとなっているが、この概念を変えていただきたいと思う。リアルはデジタルの中にもある。アーカイブしたのもリアルのものであればデジタル化は出来ない。ここで言いたいのはオンラインかオフラインかという話である。言わばデジタルかオフラインかということである。両方ともリアルである。私が今日提案したのも全部リアルである。それから歳入を増やすということもリアルな問題である。フィアンソロフィーで寄付を募ってもお金持ちからしか、成功している企業からしかない。インセンティブがなければ寄付行為は続かない。そのためには、一つ事業として言葉に関わる問題、文学を外に発信してもよい。知識と経験を持っているシニア層が外に発信していったら、それを期待している企業がここに寄付をする。営利企業の現場を考えていただくとよく分かると思うが、人がいなくて本当に困っている。その人たちを将来的にこの国に、この都に、この市に呼び込める可能性があるものについては寄付行為も活性化すると思う。そういうことを期待しながらやるという意味でもビジネスモデル化した方が良く思う。これも一つのニーズだと思う。

### 3 その他

#### (1) 第3階運営協議会の確認

**【議長】** さまざまなご意見をいただいた。今回出たご意見は事務局にまとめていただいて、1月下旬には皆様のお手元に届くことになっている。最後に第3回の運営協議会について事務局から説明していただきたい。

**【事務局】** 3回目については、今回の議論をまとめて書面会議にさせていただきたい。書面と言っても Logo チャットやメールを活用して、こちらのまとめについてご意見をいただきたい。これも会議ということをお願いしたい。

また、来年度については3回の会議開催を予定している。議題は今年度いただいたご意見を踏まえて事業の方向性を決定して、それに沿った、提示した事業についてご意見をいただきたいと考えている。日程についてはまたご相談したい。